

園芸文化館見聞録

上 田 善 弘

園芸文化館は日本の園芸文化を一般の人にも理解できるように、パネルによる解説と実際の植物により展示されていた。各室の内容について、その感想とともに述べていきたい。

第一室「園芸文化・発展の系譜」

江戸に花開いた園芸文化が、古代の日本人と花との関わりから始め、どのように発展してきたかを展示。

まず、縄文人の墓から多量の花粉が発見されたことから、太古の日本人が既に花に興味をもち、利用していたことが分かる。その後、花を歌に詠む中国の文化が日本に伝わってきたことを紹介。花を美の対象として観賞し、歌に詠む「文化」である。この文化は、日本では751年の「懐風藻」に始まり、万葉集、古今和歌集へとつながっていく。そしてさらに、花木の流行、大名庭園を管理する種樹家（植木屋）の出現、三代将軍が無類の花好きだったことから始まる、世界に類をみない江戸の園芸ブームへと発展する。伝統園芸植物の育成、園芸書の出版など、それぞれのでき事を年表形式で示されている展示は分かりやすく、日本の園芸文化の全貌を理解できる恰好の資料である。

この後、浜名湖花博の開催地、静岡と園芸との関わりについて、駿府原宿（現、沼津市）で営まれた園芸業者、植松家とその庭園、「常笑園」が紹介されていた。最後にこれらの江戸の園芸文化の特徴を、1）斑入り葉、変わり葉など、他の園芸文化にみられない奇樹異草を愛でたこと、2）鉢、飾る卓、棚などの道具類を発達させ、鑑賞の作法を確立、独特の「鉢」文化を生み出したこと、3）身分階級を越えた花文化の庶民化、として挙げていた。

第二室「伝統園芸植物の競演」

伝統園芸植物を伝統的な様式で展示していた。伝統的な様式とは、床の間に対座して観賞できるように飾ることをいう。また、植え込む鉢はその当時用いられたもの。植物の文化に関わる事柄を歴史とからめて説明されており、より理解を深めるのに効果的な演出がされていた。植物、鉢さらに飾る場所の3点をそろえ、江戸時代を彷彿とさせるものであり、その文化的価値を知らせるに充分な展示であった。



第三室
「盆栽・装飾の技」
中庭 全景

第三室「盆栽・装飾の技」

盆栽の定義、盆栽の樹種、樹形など、盆栽とはどういうものなのか、一般の人への入門解説から始まる。ここでの見所は、中庭の屋外展示の宮内庁の盆栽である。これまで外で展示されたことのないもので、圧巻は樹高2.8mもある巨大なヒノキの盆栽である。ここでも、盆栽の装飾に重要な鉢が展示されている。

第四室「新たな園芸文化をめざして」

海外の園芸文化との交流から、日本の園芸文化のもつ意義、世界的な位置について分かりやすく展示されていた。欧州に渡った日本の園芸植物や野生植物、逆に欧州から日本に導入された植物が紹介されていた。これらの生きた文化資産である伝統園芸植物を如何に保存し、継承してゆかがここでは提言されていた。

以上の展示を見るにつけ、長い年月をかけ育まれてきた独自の日本の園芸文化を如何に継承していくか、考えさせられる意義深い展示であった。



第三室「盆栽・装飾の技」中庭 檜（宮内庁所蔵）